

斎藤 学『「家族」という名の孤独』

(1995 講談社 252P ISBN4-06-207718-3 1,500円)

おちあい えみこ  
落合 恵美子

ある書店が「家族」をテーマにした本を集めた展示会を開いたとき、著者別にして一番多くの冊数が並んだのが、この本の著者斎藤学氏であったという。改めて紹介するまでもないだろうが、斎藤氏は精神科医で、診療のかたわら家族機能研究所長を務め、自助グループの援助や「子どもの虐待防止センター」の設立などにも積極的にかかわってこられた。『家族依存症』、『アルコール依存症』など、斎藤先生の書く本は、どうしてこうも軒並みベストセラーになるのだろう。その秘密がわかるかもしれないという興味もあって、この本を読んでみた。

まず気がつくのは、いじめ、非行、子どもから親への暴力、妻を殴る夫、幼児虐待、拒食・過食などの摂食障害、子殺し、不登校、母娘関係、父親不在、過労死、男らしさの問題など、まるでショーケースのように現代の社会問題、家族問題が並べられていることである。この本はもともと日本経済新聞に連載されたコラムをまとめたものだが、さすがにどの部分を読んでも、話題の社会問題が登場する。こんなにたくさん問題が解き明かされるなら、確かに読む価値がある、と思う。

またそれぞれの社会問題について、臨床家あるいはアクティビストとしての豊富な経験に裏付けられた事例が紹介されている。著者自身、「こんな微妙な臨床ケースをあえて紹介しながら、なぜ書くのか」と「まえがき」で自問しているが、衝撃的であったり胸が痛んだりするこうした事例がばかされてしまっていたら、この本の魅力は半減するだろう。紹介された事例を一つ一つ我が身と重ね合わせ、引き込まれていく。

しかしこの本の最大の魅力は、テーマや事例の面白さにあるのではない。短いけれどズバッと単刀直入な著者のコメントこそが余人をもって替え難い。アルコール依存症の夫に暴力をふるわれ続けてきた妻たちについて、著者は「彼女たちは、『自分が必要とされる必要』につき動かされて生きていたのである」(54頁)と言い切る。そうした妻たちを気の毒な犠牲者とばかり見てきた人達には、著者の断定は衝撃であろう。しかし著者は長年の臨床経験と「共依存(コディペンデンス)」についての精神医学理論を背景に、こうした判断を下しているのである。また、登校拒否

をする子より、それすらできない「登校拒否不能症」のほうが深刻であるとか(171頁)、「いじめ」は理想を求めて皆が競争する思春期にあって「そうならない」身分や立場を確認する行為であるとか(178頁)、常識を裏返したり、問題の根についての深い洞察でハッとさせられた

りするようなコメントが随所にちりばめられている。こうした点に魅了され、「人生の知恵の書」として斎藤氏の本にはまっているファンも少なくない筈だ。

しかし、本書をはじめとして斎藤氏の本は、語り口こそソフトで読みやすいが、実は相当に口に苦い良薬である。たとえば「共依存」の「アル中の妻」についての記述に続けて、著者は書く。「考えてみると共依存者とは私の熟知している日本の妻であり、母である。妻や母の役割を戯画的にまで拡大して演じ、自らの感情や欲求を失った良妻賢母ロボットである。」(59頁)

いったんこう考えると、文脈上では「病的」な共依存者について書かれていたはずの次のような下りが、にわかに身近な事例、わたしの家族や漏れ聞いた友人の妻や母のことを述べたものであるような気がしてくる。「愛しすぎる女とは・・・、自分と向かい合うことを避けようとする女性のことである。」(55頁)「自分の欲求や感情を認識することができず、したがって表現しようとしめないから、自分自身のことがしゃべれない。口について出てくるのは、夫のこと、子どものことばかりである。」(64頁)「こうした自己と他者との区別が曖昧な世界観のもとで暮らしているために、共依存者は他人の感情と自分の感情とをはっきり区別することができない」「結果として、彼らは嫉妬深い。愛する者が自分以外の者を愛すると、もう自分を大事にしてくれないかのように感じてしまう。このことが、共依存者の他人への支配欲を強める。」(199頁)

家庭内暴力の息子が、16歳のときに母に宛てて書いたと



いう手紙は、多くの子どもたちが感じながらも言えないでいる恐怖を代弁しているように思える。「お母さん、あなたは空虚です。まるでロボットだ。・・・自分の空っぽの中身を充実させてほしい。そうしないと、僕はあなたの空虚に吸い取られてなくなってしまう。」(195頁) そう、母や妻は、自分は空虚でありながら、世話を焼くことで子どもや夫の人生を乗っ取り支配する。

フェミニズムも妻や母の加害性に気づいていなかったわけではない。しかし女性の側に立つためか、家事労働の搾取とか、どちらかという被害者としての面を強調してきたように思う。最近、年金、税金、民法などにおける「主婦の座」優遇の制度上の問題点が指摘されたり(わたしも非力ながら折に触れてそうした主張をしている)、夫を「企業戦士」や「ぬれ落ち葉」にし息子を「マザコン」にしてしまう「専業主婦は社会の迷惑です」(大山治彦、「男がみえてくる自分探しの本棚」144-5頁)と発言するメンズ・リブの男性が登場したりはしているけれど、まだまだ主婦批判はこの国の言論界ではタブーに近い。本書はこれほど過激に「聖なる母」「良き妻」に挑戦しているのに、当の母や妻たちも含めた読者の熱い支持を得ているのは驚異である。

「母」を批判した精神科医というと、「母原病」の久徳重盛氏を思い出すが、斎藤氏と久徳氏とはメッセージの方向が正反対である。久徳氏は「もっと良き母たれ」と叱咤したのに、斎藤氏は良妻賢母幻想こそ諸悪の根源と主張する。時代が彼らの主張を分けたのだろうか。

本書の家族論としての理論的構造を確認すると、「共依存」という概念は、妻=母役割を説明するだけではなく、家族の心理を理解するためのキーコンセプトといった位置を与えられている。「妻が献身的な妻を演じ続ける限り、夫も働きすぎを続ける夫を演じるほかないという点で、この二人は共依存という名の嗜癖的人間関係のうちにある」(239頁)「それぞれが他人の気持ちを敏感に察知して、その期待に沿って動くとする。そうする人は、他人からそうされることを期待する。・・・その代わりに個人のあからさまな怒りや欲求は我慢させられているという共依存家族である」(211頁)最初に挙げたような現代の深刻な社会問題・家族問題は、著者にかかるると全部と言っていいほど「共依存」で説明できてしまう。

しかし著者はいったいこれらを日本家族の特徴と見ているのだろうか、それとも近代家族一般に当てはまる性格と見ているのだろうか、と問うてみると、実はいまひとつはっきりしない。「良妻賢母」について語るとき、確かに著者は「日本の妻」や「日本の母」を念頭に置いている。しかし、「情緒的家族」ともよばれる近代家族は、一般的に「共依存」的な心理的構造をもっているのではないのか。山

田昌弘の『近代家族のゆくえ』やナンシー・チョドロウの『母親業の再生産』などと併せて読むと特にそう思わずにはいられない。

「共依存」理論の適用範囲の曖昧さは、流行の「アダルト・チルドレン」概念にも表れている。アルコール依存症とかその他の問題をもつ親の子どもたちは成人してからさまざまな精神的な問題を抱えやすい、ということを意味する概念だが、この概念は作り出されてから次第に適用範囲を広げ、今ではすべての現代人は多かれ少なかれ「アダルト・チルドレン」ではないかと言えそうなところまで拡張されてしまっている。「アダルト・チルドレン」の精神的問題は親などとの「共依存」によって作られるのだから、現代の普通の家族に育てばそうなことになるわけだ。

著者は「治療の対象とする場合には、これの高じた状態であることを明確にする必要がある、ということで、私は共依存「症」という用語を用いる」としているが、この線引きもよく分からない。また、著者が示している解決法は、「自分のために生きる」(110頁)とか「(共依存ではなく)親密性」を目標に(198頁)など、もっともだけれど抽象的にすぎるが、こうした指針しか示せないのも、どういう家族が「共依存」になるのか、明示していないからだろう。

社会学者流に整理すれば、「共依存」は、日本で特に強くなりやすいとしても、日本に限らず「近代家族」一般に共通する傾向だろう。その原因はおもに性別分業にある。成人なのに自分の生き方を持てず、夫や子どもの世話ばかりしている専業主婦のいる家庭が、「共依存」の特徴を持ちやすいのは当然である。もちろん職業を持っている女性でも良妻賢母幻想から抜け出せない人もいる。しかし時間が無ければ、大して世話も焼けまいというもの。子どもや夫を心の病にしないためにも、女性よ、仕事を持ちましょう、なんて巷で言われる日も案外近いかもしれない。

(国際日本文化研究センター 助教授)